

図書館だより

～ 今月のおすすめ本 ～

ユージン・スミス

水俣に捧げた写真家の1100日 山口由美

水俣病の真実を世界に伝えた写真界の巨匠ユージン・スミス。撮影当時のアシスタントの証言をもとに、彼の独特な撮影技法や患者たちとの交流などを明らかにする。(東)



ひとりで暮らす求めない生き方 香山リカ

「ひとり暮らし」も今やひとつの暮らしのスタイルに過ぎない。頑張りすぎたり、力を込めすぎたりしないように…。精神科医である著者が、ひとり暮らしを楽しむコツを紹介する。(西)



▶詳しくは、東図書館 (☎ 62・0190)
西図書館 (☎ 75・5406) へ。

防災ひとくちメモ

～ 災害時に役立つ携帯電話 ～

携帯電話には、災害時に役立つ便利な機能が付いています。もしものときに備えて携帯電話の機能をチェックしておきましょう。

◆災害用伝言版…自分の安否情報を登録したり、家族や友人の安否情報を確認することが可能。

◆緊急速報メール…緊急地震速報や各地域の避難情報などを配信。登録不要。※非対応の機種や受信設定が必要な機種があるため確認が必要。

◆テレビ、ラジオ…ワンセグ対応の機種ではテレビ番組の受信が可能。ラジオが聴ける機種もあり。

◆カメラ…証明書類や薬の情報などを事前に写真データに保存しておけば、何も持たずに避難したときに活用できます。

◆地図…地図サービスを利用し、避難所などを探索。GPS機能付きなら地図上で自分がいる位置が確認可能。

◆ブザー…アラームなど音を出す機能で、閉じ込められたときのサインに。防犯ブザー付きの機種もあります。

◆懐中電灯…カメラに付いているライトを使い、停電時や夜間の懐中電灯に。



▶詳しくは、危機管理・防災課 (☎ 66・1089) へ。



ドクターTのひとりごと その③「舞鶴はひとつ」

今年は、旧舞鶴市(西舞鶴)と東舞鶴市が合併して70年となる記念すべき年です。本市は東西に市街地を持つ地理的な特殊性から、同一用途の施設を複数保有していることがかねてからの課題です。

本市の公共施設は、昭和40年代後半から50年代にかけて整備された施設が多く、建て替えや改修が必要な時期を迎えています。私は、市長就任直後に公共施設を一括管理する方針を示し、その基礎となる情報をまとめた「公共施設マネジメント白書」を本年3月に発表しました。これらの施設が設置された時代と比べ、社会情勢や市民意識が大きく変化した現在、安全、かつ最適な管理運営が求められています。今後の進め方としては、公共施設は市民の暮らしと密接に関わっていますので、ニーズにしっかりと耳を傾けることを大原則とし、少子高齢化、人口減少などの社会構造変化と新しい時代に必要な機能付加を十分に考慮しながら、施設の総量抑制と多機能化・複合化および建物の構造的・機能的長寿命化を推進していきます。さらには、白鳥トンネル4車線化による東西間の移動時間短縮にも着手し、「舞鶴はひとつ」との熱い思いで取り組む所存です。



ごみブクロウの(方法) 『エコな生活ホーホー』教えます!



夏になるとよく見かける打ち水。これは地面にまいた水が蒸発するときに周りの熱を奪う「気化熱」を利用したものだよ。まいた水がすぐ蒸発してしまう昼間より朝・夕がおすすめ。お風呂の残り湯を利用すれば、節水にもなるよ。

▶詳しくは、生活環境課 (☎ 66・1005) へ。

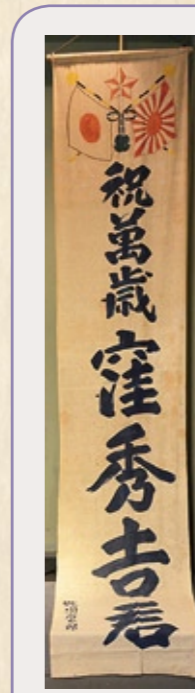
「引き揚げ」の記憶を次世代へ

引揚記念館に展示・保管している海外からの引き揚げやシベリア抑留などに関する約1万2千点の資料の中から今回は「出征旗」を紹介します。

出征旗は戦地へと向う夫や息子などを親族らが見送るために作成した旗で、出征する人の名前が書かれています。木綿などの生地で作る事もありますが、多くの場合は旗店で販売されている既製品を購入して達筆な親類や知人などをお願いして名前を書いてもらっていました。特徴的なことは、名前の頭に必ず「祝」の文字が入られており、兵士となって戦地へ向かうことはおめでたいこととされていたことが分かります。

また、旗の最上部には、日章旗と旭日旗が交差した図柄が描かれているものが多くみられ、中には、旗の周囲に房などを施した手の込んだものもありました。

旧日本軍では、出征旗に関する決まった



出征旗

規定などはなかったため、大小さまざまなものがありました。当館に所蔵している出征旗は最大のもので3桁を超えるものもあり、常設展示室で展示しています。

駅のホームや港などでは出征兵士を見送るときに、出征旗を立てて「勝ってくるぞと勇ましく(露営の歌)」や「出征兵士を送る歌」などの軍歌が歌われ、列車や船の出発時には「海ゆかば」を歌って見送ることが一般的でした。

装飾を凝らし「祝」の文字が書かれた出征旗は、盛大な見送りに使われたものでしたが、今生の別れになるかも知れない我が息子や夫、兄弟のために家族ができる最大限の見送りでもあったのです。そこには「必ず生きて帰ってきて欲しい」との家族の強い「祈り」が密かに込められたものであったといえます。

▶詳しくは、引揚記念館 (☎ 68・0836) へ。

広げよう人権の輪

～ インターネットによる人権侵害 ～

近年、至る所で携帯電話やスマートフォンを操作している人をよく見掛けます。ゲームをしている人やメールを打っている人、中にはインターネットの掲示板に書き込みをしている人もいます。

携帯電話やスマートフォンが普及したことで、いつでもどこでも、見たことや感じたことをその場で気軽に情報を発信できるようになりました。

最近は何か事件があると、いち早くインターネット上にその状況が流れます。事件現場に居合わせた人により、その現場の情報はすぐにメールで送られたり、インターネット上に発信されたりして、まるで実況中継をしているかのように一瞬にして世界中に広がっていきます。

このような情報は、その人の主観や価値観によって選択し表現されたもので、中には偏った表現がされたものもあります。また、その情報に対して、たくさんの人からさまざまな意見や新たな情報が寄せられます。

これらの意見や情報の中には、他人を誹謗中傷するものや差別的な書き込みも数多くあり、同調してさらにエスカレートした書き込みがされる場合もあ

ります。一度インターネット上に情報が公開されると、そのすべてを消し去ることは不可能で、何年経っても何らかの形で残ってしまい、被害者を長く苦しめることとなります。

インターネットは、情報の収集や発信、コミュニケーションの手段として、私たちの生活の中でたいへん便利なものですが、その一方で人権侵害が大きな社会問題になっています。

インターネットの世界は、顔の見えない世界の中で人と人がつながる場であり、指先の画面の向こう側には、たくさんの人がいることを意識しましょう。

匿名性の高いインターネットの世界だからこそ、利用者一人ひとりの人権感覚が求められています。

《人権啓発推進室》

